

川崎医療短期大学臨床検査科

小郷 正則* 近末久美子 下田 健治 通山 薫

川崎医療短期大学は、1973年に学校法人川崎学園の一員として建学されたもので、その中の1つの学科である臨床検査科は、「チーム医療の場で活躍できる有能な医療技術者の養成」を教育目標として教育に取り組んでいる。

現在ももちろんであるが、開学から2000年までの27年間の教育は、特に川崎学園という教育資源をあますことなく活用した、他学に類をみない特徴的なものであったと考えている。それは1年次には徹底した基礎知識と基本的手技の習得、そして“検査技師魂の育成”という心の教育にも大きなウェイトを置いた教育内容であったからである。そして、2年次は主に川崎医科大学附属病院中央検査部および病院病理部(以後、附属病院と略す)における臨床実習や応用実習などの実践に重きを置いたもので、3年次では、学生たちは学生実習の教育指導補助、臨床医の実験研究の補助、また新しい検査法開発のパイロットスタディなどの3グループに分かれ、指導者からマンツーマンの指導を受けた。これらの実習を4ヶ月ごとに3部署をローテーションし、学年末には実務実習の総括として研究発表会を開催した。その中では、研究の基本的姿勢はもちろんのこと、まとめたものをスライドにし、その内容をどのようにまく口頭発表するか、そして抄録集に活字と図表でいかにわかりやすく表現するかを自ら体験習得することを目指したものであった。

2000年の臨床検査技師学校養成所指定規則(以

後、指定規則と略す)の改正では、単位制と大綱化により、臨地実習7単位が導入されたため、2000年度からの課題研究実習は、臨地実習と名称が変更されたが、教育理念は現在も堅持され、継続している。以下にその概略を述べる。

本学科の到達目標は、

1)短大部門では、「教えることは学ぶこと」という考えに基づき、1年生に対する実習指導補助の体験から教育方法の概略を学ぶこと、さらに指導者の研究活動の補助的役割を果たし、研究の一端に触れることによって学びについて考えることを教育目標としている。

2)臨床実習部門と岡山川崎病院部門の実習内容は、「臨床検査技師実習」とも言えるもので、臨床検査のいずれかの領域をやや深く学び経験をすること、あるいはより興味深く実習に臨むこと、いわゆる「一芸に秀でた卒業生」を社会に送り出すことを視野に入れ、加えて指導者の研究活動の補助的役割を果たすことで、研究の一端を知ることが教育目標としているものである。

臨地実習は、実習期間を3年次の9~12月末の各8週間で月~木曜日とし、土曜日は学内での演習とした。学生をA、Bの2グループに分け、原則として1指導者に学生1名とした。配属先は1)臨地実習I-形態検査系、2)臨地実習II-生物化学系、3)臨地実習III-病因生体系および4)臨地実習IV-生理機能系の4部門で、それぞれで課題研究を実施した。総括として、研究論文集の発行

*ogou01@jc.kawasaki-m.ac.jp

と研究発表会を3年生後期の12月の第3金曜日(午後)に1・2年生も出席し、総数200名近い学生と教員で熱気あふれる研究発表会が例年開催され、それも昨年の2008年12月で7回目である。

表1は、2008年度の臨地実習の指導教員数と演題数を示したものである。2008年度は、総数51名の学生の指導に38名の教員が当たっている。具体的には、本学科の専任教員10名、附属病院との併任教員9名および附属病院の非常勤講師19名である。その内訳は、医師4名〔川崎医科大学の検査診断学(病態解析)教室、検査診断学(内視鏡、超音波)教室および病理学I・II教室〕、本学および附属病院の臨床検査技師32名(原則、附属病院は副主任以上)およびその他2名(理数系)、総数38名であった。配属学生51名をA、Bの2グループ(前半26名、後半25名)に分け、できるだけ学生が希望する分野で課題研究に関われるように配慮した。

◆研究論文集の投稿規程の概略

1) 研究論文集名:

臨床検査科研究論文集 2008 臨地実習 I・II・

III・IV

2) 体裁など:

① 学生1~2名で1演題とする。

② 書式: A4版、タイトル行(44文字×7行)、本文〔2段組22文字×338行以内7,436文字に図(写真)、表を含む〕

③ 出来上がりページ数: 2~4ページ

3) 提出原稿: PDF形式

4) 校正: 著者校正

◆研究発表会: 発表時間は7分、質疑応答は3分
PC および液晶プロジェクターは実行委員会準備

会場は2会場を使用し、同時進行

表2は、2002~2008年の7年間の研究発表会の演題数の推移を系別にまとめたものである。第1~第5回までは、ほとんどの学生が1人1演題を発表していたが、第6回からは学生1~2名につき1演題でよいとしたところ、発表数が約20%減少した。

2007年度に発表された主な演題は、各系統別にみると、

表1 指導教員数と配属学生数および演題数(2008年度)

臨地実習授業科目名	指導教員				配属学生数		研究論文集演題数	
	区分	数	専任	併任	検査部	前半		後半
1. 臨地実習 I-形態検査系	医師	3	1	2	兼任	3	2	5
	技師	10	1	2	7	6	5	10
	その他	1	1	0	0	1	1	1
	小計	14	3	4	7	10	8	16
2. 臨地実習 II-生物化学系	医師	0	0	0	0	0	0	0
	技師	5	1	0	4	3	4	6
	その他	1	1	0	0	1	1	1
	小計	6	2	0	4	4	5	7
3. 臨地実習 III-病因生体系	医師	0	0	0	0	0	0	0
	技師	8	3	3	2	6	6	9
	その他	0	0	0	0	0	0	0
	小計	8	3	3	2	6	6	9
4. 臨地実習 IV-生理機能系	医師	1	0	1	兼任	1	1	1
	技師	9	2	1	6	5	5	9
	その他	0	0	0	0	0	0	0
	小計	10	2	2	6	6	6	10

表2 第1～7回研究発表会の科目と演題数の推移

	区分	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年
		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
1. 臨地実習 I—形態検査系	医師	4	5	6	7	6	3	5
	技師	18	14	12	12	13	11	10
	その他	1	1	2	2	1	1	1
	小計	23	20	20	21	20	15	16
2. 臨地実習 II—生物化学系	医師	0	0	0	0	0	0	0
	技師	7	8	8	8	9	6	6
	その他	1	2	2	1	2	1	1
	小計	8	10	10	9	11	7	7
3. 臨地実習 III—病因生体系	医師	0	0	0	0	0	0	0
	技師	11	12	8	10	9	11	9
	その他	0	0	0	0	0	0	0
	小計	11	12	8	10	9	11	9
4. 臨地実習 IV—生理機能系	医師	0	0	0	2	1	1	1
	技師	12	12	14	11	13	8	9
	その他	0	0	0	0	0	0	0
	小計	12	12	14	13	14	9	10

1) 形態検査系

- ① 血液細胞の増殖・分化過程における核内分子の動態—核膜蛋白ラミンの局在の解析—
- ② アニメーションを用いた尿中有形成分の動画作成への試み など15題

2) 生物化学系

- ① プラリドキシムヨウ化メチル(PAM)による血糖値への影響
- ② 飲酒・喫煙が生化学検査値に短時間で及ぼす影響など など7題

3) 病因生体系

- ① 蚊体内と肝臓におけるマラリア原虫の発育について
- ② メタロβ-ラクタマーゼ産生 *Pseudomonas aeruginosa* の分子疫学的解析 など11題

4) 生理機能系

- ① 超音波を用いた血管内皮機能検査—血流依存性血管拡張反応における食事の影響について—
 - ② 12誘導心電図による左室肥大の診断基準—中、高齢者における検討— など14題
- 計42演題が発表され、研究論文集2007に掲載された。

3年課程の短大において、4年制大学に劣らない教育内容にするには、差別化した臨床現場での臨床実習と課題研究実習を取り入れることが必須だと思われる。本学科では、ここに紹介した教育方式を今後一層進化させ、「チーム医療の場で活躍できる有能な医療技術者の養成」を教育目標として、臨床検査技師教育に力を入れていきたいと考えている。